

益田市高島の動物調査雑記

大畑 純二*

Notes on animals of Is. Takashima in Masuda city

Junji Ohata

はじめに

高島は、益田市大浜港の北北西約 11 km の日本海上の北緯 34 度 50 分、東経 131 度 50 分に位置し、本土から最も近いところで約 8 km 離れている。島は東西約 1300 m、南北約 300 ~ 500 m、周囲約 4 km で東西に細長い形をしている。最高地点は高尾辻 (117.4 m) で、この近くに灯台がある。

かつては島の東端部に集落があり小学校もあったが、1976 (昭和 51) 年に本土への集団移住が行われ、現在は無人島になっている。

私たちは、2003 年 7 月 3 日、カラスバト生息調査の一環で高島に渡り生物調査を実施したが、調査中に海上波浪注意報が出たため、途中で調査を切り上げ島を離れざるを得なくなった。当日の天気は雨で、島にはわずか 5 時間足らずの滞在、実際の調査時間は 3 時間程度だったので、あまり成果は上げられなかった。目的のカラスバトは、1 羽も見られなかった。

しかし、今回の調査によって、オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* が高島の東部 (集落跡) でもかなり営巣していることが明らかになった。オオミズナギドリは、改訂しまねレッドデータブック (島根県、2004) では、情報不足 DD にランクされている。集落跡は、家屋のほとんどが倒壊して、わずかに小学校と 2 軒の廃屋の一部が残っているのみであった。オオミズナギドリは、その廃屋の床下や、廃校の床下、倒壊し完全に潰れてしまった家屋の残骸の下などに巣穴を掘っている。露岩の見られる斜面は、オオミズナギドリが頻りに歩き回ったために地表が剥がれて地肌がむき出しになっている。灯台の周囲には、営巣していなかった。「自然環境保全地域学術調査報告書」(島根県、1979) には、高島の西部にオオミズナギドリの繁殖コロニーがあり、これは県西部海岸では唯一であると報告されている。

今回の調査では、島の集落跡付近で陸貝 3 種を採集した。サンインコベソマイマイ *Satsuma omphalodes* と、大小 2 種類のキセルガイ類である。島根県在住の陸産貝類研究者である岡村一郎氏に調べていただいた結果、大きい方の殻高 17 ~ 18.5 mm・殻径 4.5 mm の種はシイボルトコギセル *Phaedusa sieboldii* だということであった。これまで、シイボルトコギセルは石見部では見つかっておらず、山口県見島からいきなり島根県東部に飛んで隠岐島前と島根半島東端部の美保関で見ついているだけであった。今回の調査で、高島の集落跡付近のヤブツバキの樹幹にたくさんぶら下がっているのが確認された。石見部では初確認である。



ハリマギセルの一種



シイボルトコギセル

* 島根県立三瓶自然館, 〒 694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8, Tane, Sanbe-cho, Ohda-shi, Shimane Prefecture

殻高 13.5 mm・殻径 3 mmの小さい方の種はハリマギセル *Paganizaptyx harimensis* に近縁の種と思われるが、種名は不明である。ハリマギセルは殻高が 11.5 mm・殻径 2.7 mmで、高島産の不明種よりかなり小型である。

また、集落跡で、樹幹を歩いていたオオアリ属 *Camponotus* sp. と思われる見慣れないアリ 1 匹を採集した。体長は 10 mm 前後であり、ユミセオオアリやアメイロオオアリに似ているが、少し形態が異なっているように思われた。

船着き場付近の岩場では、キベリゴマフエダシヤク *Obeidia tigrata minima* 1 頭を採集した。単なる個体差かもしれないが、本個体は三瓶地域に産する個体と比べると、翅の橙色が鮮やかで黒斑も明瞭だが、腹部の色は黒みが強く橙色部分がほとんど無い。

他に、ツクツクボウシ *Meimuna opalifera* の羽化殻 1 個、ホシハラビロヘリカメムシ *Homoeocerus unipunctatus* 雌雄各 1、ツマキヘリカメムシ *Hygia opaca* 雌雄各 1、ハネナシセスジキマワリ *Strongylium apterum* 1 頭を採集した。

最終氷期における最も寒冷な時期は今から約 2 万年前で、この時の海水準は -80 ± 5 m とされている。当時は、隠岐諸島や高島は本土と陸続きであった。その後海水面は上昇し、1 万 6 千年前には海水準

が -60 ± 5 m に達し、隠岐海峡が形成された (大嶋, 1990)。

高島と本土との間の海峡は水深が 50 m 以上あるので、隠岐諸島とはほぼ同じくらい前に本土から独立して、以後島であり続けているということになる。

高島は長い間住民が生活していたため、ここの自然は人間活動の影響を強く受けている。また、本土に近いので、本土からの動植物の漂着や人の移動に伴って動植物の移動もかなり多くあったものと考えられるが、ここに生息する生物については少し注意を払って調査する必要があるのかもしれない。

参 考 文 献

- 東正雄 (1982) 原色日本陸産貝類図鑑. 保育社.
 JADG (2003) 学研の大図鑑「日本産アリ類全種図鑑」. 学習研究社.
 中根猛彦他 (1984) 甲虫編. 原色昆虫大図鑑(巻). 北隆館.
 中根猛彦 (1987) 甲虫. 学研生物図鑑「昆虫」(巻). 学習研究社.
 日本第四紀学会編 (1987) 日本第四紀地図. 東京大学出版会.
 大嶋和雄 (1990) 第四紀後期の海峡形成史. 第四期研究 29(3)p.193-208.
 島根県自然保護研究会 (1979) 高島. 自然環境保全地域学術調査報告書. 島根県.
 高野伸二編 (1985) 日本の野鳥. 山溪カラー名鑑. 山と溪谷社.